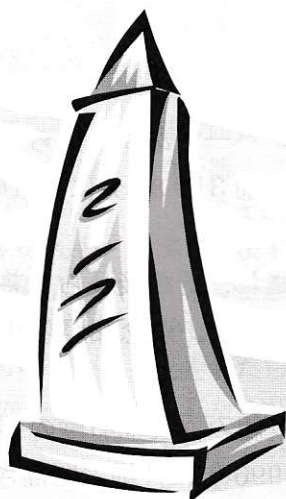


■おきなわ環境ネット■

沖縄環境ネットワーク通信 34号

We are alive under many laws...



訃報・宇井 純先生

カルロス・バルガスさん来沖日記

やんばる視察 林道をゆく (2)

龍谷NPOフィールドワーク同行記

沖縄フィールドワークに参加して

シンさんの辺野古日記より

… 内海 正三

… 照屋 久子

… 編集部

… 津川 大作

《環境情報おきなわ》

訃報 宇井 純先生



沖縄環境ネットワークの創設メンバーであり、長らく世話人として活動いただいた顧問の宇井 純先生が、去る 11 月 11 日午前 3 時 34 分に東京の慈恵医大病院でご逝去されました。74 歳 でした。

昨年秋に心臓のバイパス手術をされ、その後長らく慈恵医大に入院されておられました。私たちも回復を心待ちにしていたましたが、残念ながら訃報に接し落胆しています。

沖縄の環境問題に全身全霊で取り組み、廃油石鹼の製造販売から赤土汚染や畜産排水処理等、沖縄の水環境に係わり続け、1996 年に沖縄で開催された「日本環境会議沖縄退会」での提言を基に沖縄環境ネットワークを設立されました。

2003 年に沖縄大学を退任され東京に戻られてからも、全国を講演や現地調査で飛び歩き、後進の指導にあたられていました。

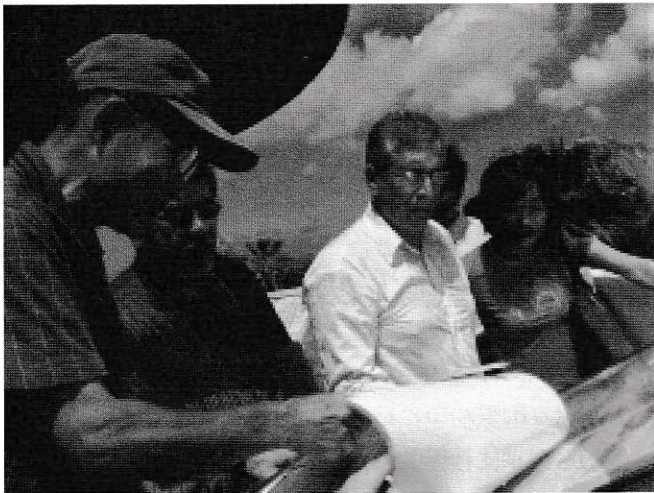
沖縄が大きな転換点を迎えているいまこそ、宇井先生のお力がより必要になるはずだった矢先の訃報に衝撃はまだ鎮っていませんが、宇井先生の志を少しでも実現できるように、これからも世話人・事務局共々頑張りたいと思います。

宇井先生の仕事場であった沖縄大学では、ちょうど亡くなられた日の翌日からの学園祭の中で、宇井先生をお呼びして講演していただく予定でした。宇井先生も学生の企画に応えることを励みに頑張っておられました。先生の参加が叶わなかったので、以前講演した映像をビデオで流し、合わせて先生の生前を偲びました。

「沖縄環境ネット」では、次号で宇井先生の追悼特集を組む予定です。先生と親交のあった会員の皆様も多いことと存じますので、会員の皆様からの追悼文をお寄せ下さい。基本的に字数の制限はありませんが、当方で編集させていただく場合があることをあらかじめご了承下さい。郵送・ファクス・メールいずれでも結構です。締切は 2007 年 1 月 15 日とさせていただきます。本紙最終面にあります電話・ファクス、もしくはメールアドレスあてにお送り下さい。

コスタリカからの使者 カルロス・バルガス氏を迎えて

内海 正三 (沖縄環境ネットワーク世話人)



嘉数高台にて説明を受けるバルガス氏 (中央右側)

日本の平和憲法が改悪される危機にあるとの情報に、コスタリカのカルロス・バルガスさんが来沖されました。バルガスさんは世界反核法律家協会副会長で、今回は広島で行われる原爆投下をしたアメリカを裁く国際民衆法廷の検事を兼ねての来日です。コスタリカ大学で法律の教授であると共に、弁護士として人権問題にも関わっていらっしやいます。ロベルト・サモラさんの来沖の際に通訳をしていただいた星野弥生さんが、今回も東京から同行して下さいました。コスタリカの国母といわれるカレン・オルセンさんの来沖を含めると3回目の来沖で、星野さんはすっかり沖縄のコスタリカ担当通訳定着です。それだけ沖縄とコスタリカをご存知なので、安心です。

沖縄に向かう飛行機の中で、沖縄環境ネットワーク刊行の『沖縄からコスタリカへ 平和憲法とエコツーリズムの旅』を二人でご覧になりながら話をされていたので、お会いした時、少し盛り上がりました。書中にバルガスさんの知人が数多く登場するそうです。

出迎えは那覇在住の岡島 実弁護士と水島桃子さんと娘さん (ビデオ担当の高校生)、沖縄環境ネットワーク世話人の川満昭広さんと内海です。少し到着が遅れたので、直ぐに最初の訪問地である宜野湾市の嘉数台地の説明をして現地に向かいました。嘉数台地の展望台には既に普天間爆音訴訟のメンバーであるの榮野川さんが待ち受けていらっしやいました。沖縄国際大学の佐藤 学教授と世話人の真喜志好一さんも合流して、沖縄戦の当時の嘉数台地の様子と現在の普天間飛行場による基地被害

やヘリ墜落事故の位置、及びアメリカの基地設置規準に違反する飛行場近辺の学校や病院の多さを説明しました。バルガスさんからは基地被害について日本政府ではなくアメリカ政府を相手取り、アメリカで訴訟を起こすほうが効果的との意見があり、資料を検討し協力したいとの意向を表明されました。

ついで沖縄国際大学に向かい、墜落現場で当時の日本の主権が侵された様子を参加者が交互に説明しました。墜落の証拠である黒焦げた壁はビニールシートに覆われ、校舎跡には一回り大きな建物が建設されている真最中です。佐藤学さんが大学当局に屋上からの見学の許可を急遽取っていただいたので、眼下に普天間飛行場と墜落現場が広がり、視線を上げれば宜野湾市のほぼ全景が一望に見渡せる絶好のロケーションで貴重な体験をしました。

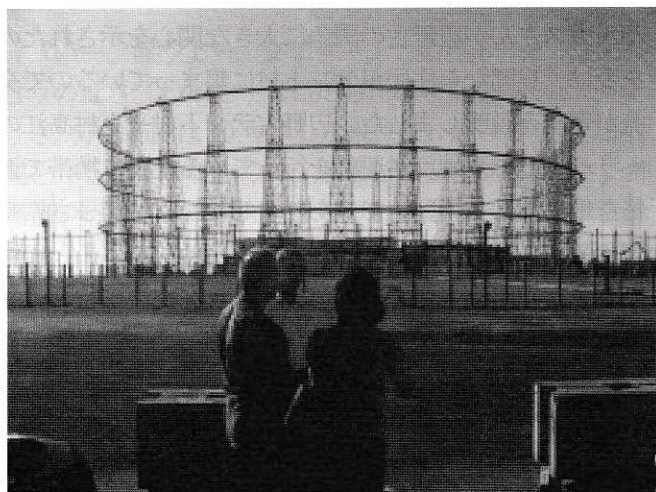
墜落現場の直近の食堂「パブロ」での昼食に向かう時に、翌日のシンポジウムにも参加される琉球大学の高良鉄美教授が合流され、打ち合わせと交流を兼ねた昼食をしました。大変ボリュームがあり美味しい食事が一段落したのが1時半で、真喜志さんが今から辺野古に向かい交流をしようかと提案しました。嘉数台地での説明でバルガスさんが辺野古の闘争に大きな関心を示されたのを受け、昼間なら住民がテント村に集まっているので交流が可能と説明しました。辺野古テント村や東村高江のヘリパットで基地反対運動を行っている住民に携帯で連絡を取りました。緊急ではありましたが宮城節子さんとや当山栄さん、高江からも遅れて安次嶺ゆきねさんと後藤のり子さんがお子様を連れて参加され、交流が行われました。



辺野古の浜の鉄条網前にて

金城祐次さんの闘争の歴史の説明と意見交換が行われ、浜辺に移動して辺野古崎の米軍基地計画地を有刺鉄線をはさんで睨みながら、非暴力阻止闘争について当山栄さんから説明しました。バルガスさんからは「辺野古や高江の戦いが若い人への教育になっている。戦いの裾野の広がりの遅さを悲観する必要はない。世界の平和運動の最先端で戦っている皆さんの姿は、多くの人々に感動と共感を与えている」と話され、今日の交流の中でコスタリカの教育について新たなインスピレーションを得たので、今書いている論文に反映させたいと言う発言がありました。現地でも新聞やテレビのインタビューを受け、その後読谷村に向かいました。

当初の4時半より40分ほど遅れて、午後5時10分に知花昌一さんと合流しました。知花さんは急遽行われた辺野古の交流の意義を理解して下さり、電話で「後ろは空けて待っているから、十分な交流を辺野古で行ってください」と言われました。最初に「象のオリ」と呼ばれるレーダーサイトの前で、強制収用に反対する戦いと現在返還が日程に上っている成果について説明されました。3億円を超える軍用地賃貸料よりも自分たちの意思による地域づくりを選択している読谷村の戦いに、バルガスさんは非常に共感されました。一行はその後、チビチリガマに移動して交流を継続しました。



読谷村の「象のオリ」の前にて

バルガスさん一行は、翌日は朝から糸満市の摩文仁にある慰霊碑やひめゆり祈念資料館を見学して、午後の講演会から合流しました。行動派らしく、最初は座って通訳と交互に話していたのが、徐々にジェスチャーが大きくなり、最後には立ち上がって全身で講演を続けました。

コスタリカは面積5.2万平方キロ、人口400万人の小さな国だが、外交的にはアメリカに対しても一国対一国で常に対等の意識で臨んでいること。軍事費を教育費に



当て、国民の福祉に充当したので、中南米でも指折りの豊かな国になっていること。平和を創造するという考え方から、国際紛争に積極的に仲介をしていること。小学生から選挙に積極的にかかわり、環境教育にも力を入れている。沖縄に来て気候風土が非常によく似ている。そしてラテンアメリカ人のような風貌の方もたくさんいる。熱い思いも共通している。是非この国の人と手を携えて平和のために協力していきたい。そのために今後とも対話を重視し、共感を広めていく努力をしようと思う。

バルガスさんはこのような講演を行いました。

その後、高良勉さん、桜井国俊さん、高良鉄美さんと交えて、佐藤学さんのコーディネートでパネルディスカッションを行いました。

それぞれの最初の報告は、高良勉さんが沖縄の歴史と民族自決権について。桜井国俊さんが教育基本法改悪とコスタリカの教育および環境政策について。高良鉄美さんが沖縄戦を体験したことから平和への希求は当然の帰結である。その平和憲法の根幹を否定する改憲には沖縄の立場で反対すべきと話されました。

クロス討論では、高良勉さんの沖縄が自決権を行使した時にはコスタリカは承認していただけるかとの質問に、差別的地位から脱却する為の民族自決権は国際社会で認められており、コスタリカのみならずラテンアメリカの全ての国や世界から必ず承認されると思いますと答えられました。その答えに会場から多くの拍手があったのは、この間の沖縄の意志を無視し続ける日本政府への反感が表れていたということでしょう。

集会のあとで行われた懇親会でもバルガスさんは陽気に各自と交流を重ね、サンシンと太鼓に合わせて身体を動かしておられました。疲れも見せず、南風原町の「南風原文化センター」へと移動され、そこでもカチャーシーを踊られたとのことでした。

山原視察 林道をゆく (その2)

照屋久子 (沖縄環境ネットワーク世話人)



山崩れてガードレールまで壊された伊江川上流域 (1992 年撮影)

造林名目の伐採

「皆伐」という言葉がある。文字通り森を一木一草のこさず切り取ってしまうことだ。イジュ・ウラジオカシ・イタジイの高木、タブノキなどの亜高木、サクラツツジ・ハクサンボクの低木、地表を覆うオニヘゴ・アオノクマタケランなどのシダや草・コケ類で覆われていた湿潤な森が、わずか数日の間に赤い地肌を露出した砂漠のような風景に変貌していく。バリカン刈りともいわれ、滝や沢も枯れて湿った溝に変わり果てた沢には、川石が強い陽射しにさらされて、生きものの気配さえ感じられない風景が現れる。

始めて皆伐の現場を見たのは 17 年前、玉城長正氏の案内する伊江川上流の自然観察会であった。伊江川は河口から上流まで砂防ダムや取水堰のない山原で唯一自然な状態を保っている川だということで、参加者の期待は大きかった。途中林道が閉鎖されていたため、当時はまだ舗装されてなかった伊楚林道を参加者全員で、かなりの距離を歩いていった。やがて皆伐作業のために交通が遮断されていたことがわかった。

これまで入ったことがない深い山原の森の中でチェーンソーの音が響き渡り、わずか数十秒で高い木を次々と倒していく光景に出会って、恐ろしい場面に出会ったように全員が身を隠すように黙って眺めていた。たった 2~3 人の作業で深山の森の木々を皆伐してしまうのだ。林道沿いのノグチゲラの巣を観察しながら森の散策を楽しんでいた参加者は、途端に暗い気持ちになっていった。

皆伐された山はしだいに草に覆われ緑を取り戻したかのように見えるが、大雨が降るとたちまち亜熱帯の薄い腐葉土は剥がされ、雨の降るたび表土の赤土は谷間を

埋めていく。さらに倒された木の根が枯れ始めると斜面で土砂崩れが生じ、大量の赤土が流出し海を汚染する。

皆伐は「緑のダム」としての保水力の低下だけでなく、土砂は河口閉塞をも引き起こしている。山原の河川の 80% が河口閉塞を起こし、本来繋がっているはずの川と海は閉ざされ、ここでも自然破壊が起きている。当時、海までゆったり流れていた伊江川も近年見るたびに河口閉塞の状況にある。

山原の川には多くの生態系、ヌマエビ、テナガエビ、カニなど多種が生息しているが、特に川魚、エビ、カニの幼生が遡上する 3 月から 5 月に閉塞が多い。リュウキュウアユを人口繁殖させて復活させる試みがあるが河口閉塞している状況では不可能だと、伊藤嘉昭氏はその著書「沖縄やんばるの森」で述べている。

話は元に戻り、伊江川上流の皆伐数日後、森が切り開かれて強い陽射しが射す倒木の中で落葉や枝を掻き分けて地上採餌するノグチゲラを見た。高齢樹の深い森を生息地とするノグチゲラだが、森を失った後もその地を容易に離れることはないというのだ。狭い山原の森で新しいテリトリーを見つけることは困難を極める事らしい。伐採後もテリトリーを離れられず、車が近づいても必死に餌を捜していたノグチゲラの哀れな姿が忘れられない。

高率補助による自然林の皆伐

復帰直後はそれほどでもなかった皆伐が 1980 年前後から猛烈な開発の波となって押し寄せてきたのが辺野喜ダムの開発でダムの水源涵養林である自然林が灌水面積の 4 倍を超える 200 ヘクタールも皆伐された。その 72% が県営林でダムを造りながら水源涵養林を伐採した為ダムは常に水不足。

沖縄の林業は木を切ると補助金が降りるしくみになっており、造林事業は国から 70 パーセント、水源基金から 30 パーセントという造林の名のもとに、日本で唯一残されてきた豊かな亜熱帯の照葉樹林の森と沖縄の貴重な生物を育ててきた森林を伐採してきた (山原の山を守る連絡会編「亜熱帯の森やんばる」から)。切られたイタジイの自然林は 60% がチップ材として商品価値の低い、サトウキビよりも安い価格で売られていたが、現在はチップの生産もなく、伐採されたあと放置されている木々が多い。

山原では最も開発が激しい時期、1979年～1991年には年平均200ヘクタール近く皆伐されてきた。200ヘクタールという面積は皆伐が禁止されている保護地特別鳥獣保護区より大きい（「沖縄やんばるの森」より）。

その後皆伐面積は縮小されてきたが、ヤンバルクイナの絶滅が叫ばれてる今も生息地での皆伐は止まってない。ヤンバルクイナの危機を高らかに叫んでいる沖縄県や国頭村が生息地を破壊し続けているのを、どう理解すればよいのであろうか。

止まらない生息地の皆伐

国頭村奥地区の国道58号線沿い、1.7ヘクタールを皆伐。国道58号線沿いの皆伐にはこれまで山奥の伐採と違い、あまりにも大胆すぎる。隣接する森に入るとたんノグチゲラを見かけた。この伐採地も貴重な生物の生息地であったはずである。伐採地の近くのチヌフク林道ではヤンバルクイナが走って横断する姿をみかけたばかりであった。

同場所でノグチゲラが子育てする様子を、地元紙「沖縄タイムス」が今年5月17日付の紙面に「伐採地の横で子育て」というタイトルで写真とともに掲載している。

安田の皆伐

ヤンバルクイナ個体群存続可能性分析のための国際ワークショップが、地元（国頭村）代表や行政機関・専門家が集まって公民館で開催されている当日、開催地の国頭村安田（あだ）の東側の森では皆伐の最中であった。安田付近は20年以上前に広大な皆伐があり、固有種の生息できる森はわずかばかりだということ（前述の玉城長正氏の話）。ワークショップではヤンバルクイナの絶滅回避・ヘマングース対策・人口飼育生息地を国頭村に造る・外来種の進入を防ぐフェンス建設などの行動計画が報告されている。



安田の皆伐現場

謝敷林道の皆伐

謝敷林道の工事が完了し、約一年後皆伐された。国頭村佐手から国頭村謝敷を繋ぐ林道で、林道工事の頃からヤンバルクイナの鳴き声やノグチゲラの営巣木が見つかった区域である。視察会でイボイモリを林道で見つけた事もある生物多様性を代表する森であった。皆伐された森は60年以上を越える老齢樹で国頭村西側では最も貴重な森であった。切り株の半径が一メートルほどのもある。



謝敷林道の皆伐現場（2006年1月）

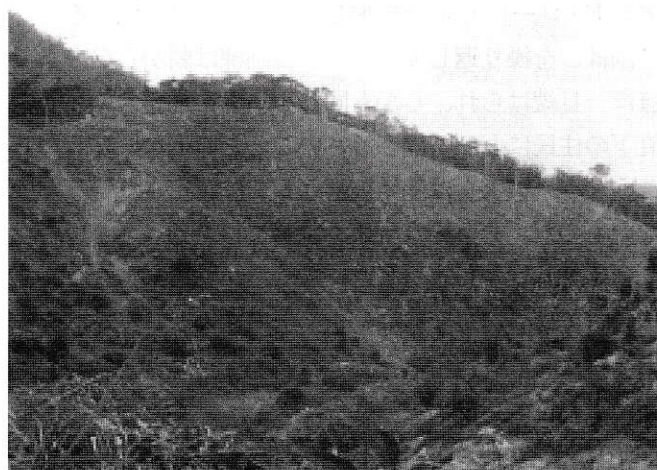
伊江林道では、（東海岸の県道70号線から西海岸の辺野喜ダム入り口までの林道で10km以上もある。途中、西銘岳登山口まで、伊江一号、その後を伊江二号林道と呼ぶ）二ヵ所の現場で伐採がされている。

県道70号線から700メートルほど林道にはいった南側の谷間、自然林と松の混合林である。この森は約25年前にイタジイを主とする自然林を伐採して松を植林した場所で切り倒された木が細いことが切り株で解る。何の為の伐採なのであろうか。



上記混合林の伐採現場（2006年9月）

さらに奥へ一キロ程いくと奥2号林道への交差点があるがこの交差点の北側でも一年ほど前から伐採があった。山頂の一部だけ残して谷間まで伐採されているが残された周囲の木々もやがて立ち枯れしてしまう。ここの伐採はかなり広範囲の為、一枚の写真に収めることができない。伐採によって幾つもの沢が枯れたり、埋まったりしたであろう。森の沢は野生生物の最も大事な生息地である。特にヤンバルクイナはミミズ、貝を好んで捕食するので影響が大きい。赤い地肌を剥露させた山で森の生物が生きてゆけるはずがない。森を追われたヤンバルクイナを近くの草地で見かけるようになったという。草地では餌は減り、野良猫や野犬に襲われる危険性が高くなる。生息数が減ってゆくのも当然なことである。



上の2点とも伊江林道の皆伐現場（2006年9月）

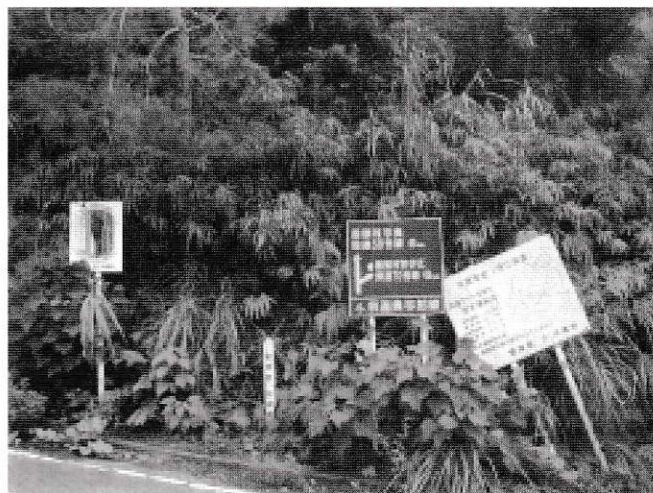
造林事業

皆伐の後、造林で国庫補助金が受けられる。補助金は国頭村の場合、伐採・植林は国頭村森林組合のよって行われている（山原では国頭村以外では造林事業はされていないはずである）。事業費は苗の種類やポット苗かどう

かでも違ってくるが、一ヘクタール当たり植林時に約130万円、その後の管理費に五年間で約300万円が支払われる。苗は一ヘクタールに4800本植えられるように150万円のなかに苗代も含まれるという。造林をする者にとっても儲かる仕事とは思えない。世界的にも貴重な自然林を安い労賃の為に伐採しているのか、皆伐を止めるにはなにをすべきなのか。大きな課題である。

沖縄県「みどり推進課」の造林担当者に、前記した伊江林道の皆伐の件を問い合わせたところ、造林の申請が国頭村からまだされてないので、面積や植林の種類はわからないと言う。伐採される場所や面積は、県には事前に通知や相談などはされず、造林申請後に現場に出向くという。皆伐される場所は土地の所有者がきめているというのである。

造林地が貴重生物の生息地であるかどうかの確認はされることがなく、文化財や保護区で造林する事はありませんとの説明であった。前記したように山原の保護区は特別鳥獣保護区の200ヘクタールしかない。それ以外の森はすべて皆伐の対照になっているのであれば多様な山原の動植物は守れない。伐採された森が元の森に戻るには百年はかかるといわれているが絶滅した生物は戻すことはできない。



皆伐現場の向かい側の道路には、沖縄県の管理を示す道路標示と貴重生物の生息地を示すノグチゲラの看板が並んで立っていた

今年もまた辺野古の海で… ～山原フィールドワーク同行記～

酒井 哲哉（編集部）

毎年夏休みになると、本土から沖縄でのフィールドワークの依頼がある。その中でも熱心に沖縄にやってくるのが京都にある龍谷大学のサークル「龍谷ボランティア・NPO 活動センター」だ。今年も基地と環境問題をメインテーマにコーディネート依頼があった。これで4年連続、もう恒例行事のようになってしまった。毎年ほとんどの学生が入れ替わるので、同じ学校でもいつも初の顔ぶれになることが多いのだが、同じ学校の同じサークルと毎年接していると、やはり親近感は沸いてくる。ということで、今回も気持ちよく案内させてもらった。

8月21日午後、メンバーが沖縄に到着してからすぐ、沖縄大学の部屋を借りて沖縄環境ネットワークの世話人である真喜志好一さんにレクチャーをしてもらう。パワーポイントを駆使した説明は要を得たもので、なおかつ本土の普通の大学生には初めて聞くことばかりの話だったから、一時間のレクチャーがあつという間に過ぎた。その後若干の質疑応答があり、翌日のスケジュール確認をしたあと、この日は解散。

翌22日、朝9時に本島南部にある糸数壕（アブチラガマ）に集合する。ここは第二次大戦の沖縄戦の際、県立南部病院の分館として利用されていた壕だ。沖縄にある数多くのガマの中でも、最も見学者の多いガマの一つである。事前にひとり一個ずつ用意した懐中電灯を片手に中に入る。環境ネットワークの世話人のひとりである川満昭広さんが今回のガイドを引き受けて下さった。

ガマの中は文字通りの暗闇で、懐中電灯がないと何も見えない。川満さんによると、一時期、見学者のために電灯をつけていた時期があったらしいが、「それでは本当の意味の体験にならない」という意見が出て、結局無くしたそうだ。

ガマの中は結構広く、足元は湿っていて滑りやすい。中はいくつかのブロックに分かれていて、それぞれ機能が違っている。

一時間ほどでガマの見学は終了し、一行は車で20分ほどの場所にある糸満市摩文仁の「平和祈念公園」へと向かう。ここは沖縄戦における最後の激戦地で、景勝地である断崖から多くの島人が飛び降りて亡くなった凄惨な場所でもある。本当はここに建つ「沖縄平和祈念資料

館」に入りたかったのだが、時間の関係で残念ながらバス。各県の供養塔が立ち並ぶエリアを通り抜けて、一番奥まった場所にひっそりと置かれている「勇魂の碑」（第32軍司令部慰霊碑）まで歩く。普段、ここまで来る人はあまりいない。

この碑の真下はガマ（壕）になっていて、沖縄戦で最後の司令部が置かれた場所である。最高責任者であった牛島中将は、昭和20年6月23日にこの場所で自決、それを追って他の司令部将校も自決し、この日を持って日本軍の組織的な戦いは終わったとされている（沖縄では「慰霊の日」とされ、県独自の休日）。

牛島中将は自決の際、「最後の一人まで戦え。捕虜になるな」と言い残して死んだ。そのために、この後も実質的な戦闘は続き、死ななくていい人々が大勢死んだ。そういう戦争の無意味さ、愚かさを感じてもらいたかったので、ここまで一緒に来てもらったのだが、当然ながら初めて聞く話だったらしく、みんな熱心に聞いてくれた。

この後、高速に乗って本島南部から中部へと移動し、昼食をはさみながら、普天間基地が俯瞰できる宜野湾市の嘉数高台と沖縄国際大学のヘリ墜落現場、それに嘉手納基地を見学した。嘉手納基地では戦闘機が「タッチ・アンド・ゴー」（車輪を接地してすぐにまた離陸するという訓練）を繰り返していた。この訓練は朝から夕方までほぼ一日続けられ、しかも同じルートを飛ぶので、その直下の住民にとってはうるさいことこの上ない。しかしこういう「被害」は基地被害としては認定されることのないものだ。そういう現実も沖縄にはある。

嘉手納基地からまた高速に乗り、一路辺野古を目指す。辺野古では「命を守る会」事務局の富田晋さんが話をしてくれた。もう何年もここで頑張っている晋さんの話は学生たちにとって衝撃的だったようだ。私も何度か同様の話を聞いているが、そんな私でも聞くたびに胸の詰まる思いがする。

こうしてまたフィールドワークの一日が終わった。後日、参加した学生にレポートを寄せてもらった。今年もまた、何かを心に刻むことができた夏だったようだ。

沖縄フィールドワークに参加して

津川 大作

(龍谷大学経済学部2回生 2006年度国内研修代表)



平和祈念公園の展望台にて

私たち「龍谷大学ボランティア・NPO活動センター」の学生スタッフ13名にとって、去る8月22日に行なわれた沖縄でのフィールドワークは、とても貴重な体験でした。

戦争が終結してから約40年後に産まれた私たちにとって、これまで戦争についての学習は、教科書やテレビの映像を通してでしか学ぶことが出来ませんでした。日本で唯一地上戦が行なわれ、現在も基地建設などの問題が強く残っている沖縄に行くことで、戦争の恐怖、重みを肌で体感することが出来ました。

現地の人たちとの交流を通して、今までの自分たちが持っていた戦争や沖縄の基地問題に対するイメージも大きく変わりました。特に、私たちが一番心に残ったことは、フィールドワークの最後に訪れた辺野古での「命を守る会」の方たちとの交流でした。実際に現在も基地建設問題に立ち向かっている方の話を聞け、また、私たちとあまり年齢の変わらない方の話(注)ということもあって、その熱意に私たちの心は大きく動かされました。

フィールドワーク終了後、宿泊施設でその日の振り返りを行ないましたが、辺野古での体験が一番心に残っているという意見が多かったです。

また、まだ記憶に新しい沖縄国際大学のヘリ墜落事故現場や、今も軍の飛行機が離着陸している嘉手納基地を見学することによって、自分たちが普段見ているニュースや新聞から受け取る印象や価値観と、実際に現場にいる人たちの考えていることの違いが強く感じられました。

今回、私はこの研修と時事問題を関連させたいと考えていました。8月中旬の時点では、メディアではポスト小泉や北朝鮮のミサイル発射に関する動きなどが大きく取り上げられていたので、これに関してどのような動きや変化が沖縄で起こっているのか、といったことを自分の中でひとつのテーマとして掲げていました。

しかし実際は、現地の人からすると、北朝鮮から発射されるかもしれないミサイルよりも、自分たちの近くにある基地、そしてそれを管理しているアメリカ軍のほうは何倍も脅威であるということを知りました。私の中で「日本政府」や「アメリカ軍」に対する印象は大きく変わり、そして、東京や大阪を中心に流れているニュースから受け取る情報は必ずしも正しいわけではなく、それがすべてではないということを学びました。

今回の研修は、かなり多忙な日程になっていましたし、フィールドワークもとても内容の濃いものでした。参加者は、それぞれ感じることや考えたことが違うと思いますし、「今回のフィールドワークは自分達にとってどのような意味があったのか」という問いに対する答えはすぐに出せないかもしれません。しかし、私たちは、今回学んだこと、それぞれが感じたことを、これからの生活に生かさなければならぬし、これだけの素晴らしい学習の場を与えてくれた皆さんに感謝しなければならないと思っています。

短い期間でしたが、本当にお世話になりました。ありがとうございました。

※編集部注…「命を守る会」の事務局を担当している富田晋さんは23歳。



富田さんの話に関心する学生たち

「シンさんの辺野古日記」より

辺野古の海で基地建設に反対し続ける人々のひとり、富田晋さんがネット上で公開している日記から抜粋して紹介します（文章は編集部で若干の手直しをしています）。

久しぶりに日誌を更新いたします。なかなか日誌が更新できずにすみません。

北朝鮮バッシングと

今回のパトリオットミサイル配備阻止行動

10月9日の午前中に監視行動をやっていると、何人かの通りすがりの人達から色々なことを聞かれました。その時に僕が話した話を書きます。

Aさん「なんねー？なにやっとなるばー」

晋「パトリオットミサイルの配備に対する阻止行動をやっているんですよ」

Aさん「わん（私）も軍事基地はいらんと思っているば。しかしね、北朝鮮のミサイルも怖いわけさ。打ち落とすだけならいいんじゃないかー？」

晋「いー、違うよー。まずさー。このパトリオットって言うのはさ、わったー（私たち）を守るものではないわけさ。守備範囲は20キロしか飛ばないわけでしょう。沖縄を守るのではなくて、米軍を守るものだけわけさ。沖縄戦の時に軍隊は沖縄を守らんかったさーね。それと一緒にさ。軍隊は民を守るのではなくて国益を牛耳っている一部の人間を守るためにあるわけさねー」

Aさん「そうかもしれんがよー。北は攻撃してくるよ」

晋「なんでよ。沖縄も日本もよ、大した資源もないばーて。そんな所に侵略して北朝鮮にどんな利益があるば？アメリカがイラクに攻撃した時もさ、大量破壊兵器がある、としーしが（したけど）ありゃせんかったば。それでイラクの侵略から防衛するちよ、抵抗する軍隊を一週間程度で全滅させたさーね。その後はイラクの人々の土地と石油を奪っているさー。だいたい北朝鮮がこっちを侵略しち、自分の国が制圧されたら何にもならんさ」

Aさん「だって沖縄戦もそうだけどよ。第二次世界大戦の時に朝鮮にひどいことしたからよ。恨み持っているでしょう。恨みは怖いさーね。その怒りで攻撃してくるか

もしれんさー。だいたい沖縄はバカにされてるんどー」

晋「いえー、おじさん。北朝鮮の年間の軍事費を知ってるば？アメリカは年間35兆円。日本は4兆円。北朝鮮は年間15億円さー。今、テレビでしきりに『北は怖い、日本はバカにされてる、』って言っているさ。この差、見てそれが怖いことは変わらんどーやあ」

晋「おじさんじゃあ聞くけどよ。恨みがあるんしが、なんでそれを安部さんは煽ることをするばーよ。靖国行って、辺野古に基地建設しち、パトリオットから最新鋭の戦闘機やらヘリやら配備しち、どっちが脅威だわけ？アジアの人達は日本とアメリカ帝国が侵略してくるかもしれんってわったーを怖がってるんど」

Aさん「あっそうか。恨みは煽ったらいかんどーや。いかんしが（いけないことだけど）、独裁者のキム・ジョンイルはどうなるねー？あれは何するか分からんよ？核も持っているって言っているさーね」

晋「おじさんよ。キム・ジョンイルがどうして政権をとってられるか知っているば？あれはよ、『国民の皆さん今、アメリカと日本が再軍備して私達を侵略してこようとしている、それから身を挺して国民を守るのは私しかいない！私しかいないから文句は言わせない』と言っているば。つまりよ、まずこっちがね、侵略は二度としませんって断言するべきよ。わんもキム・ジョンイル嫌いどー。国民を飢えさせて自分は権力の保身に走っているところが許せんわけよ。しかし、キム・ジョンイルを倒すのはわんじゃあらん。北朝鮮の人々さ。まずは自分達が銃口を下ろすべきさーね。国益のために戦争しようち言ってる安部さんこそ引きずりおろさんといかんよ」

Aさん「いえー、キム・ジョンイルどー、あれは侵略しようとしているばーて」

晋「だー、違うってばー。キム・ジョンイルは独裁者で大嫌いだけどよ。日朝首脳会談の時にキム・ジョンイルは、不可侵条約を結んでくれないかー？って小泉さんに言っているよ。それ、蹴ったの日本政府さ。それはどう言うわけ？」

Aさん「アギ！そんなことがあったの？へえー知らなかったばー。いーん、でも拉致とかしているさー。横田さんとかかわいそうさー」

晋「拉致はいかんよー。けど、戦争したら元も子もないさーね。それ「からおじさんも知っていると思うけど、日本はもっとひどいことを第二次世界大戦の時にしてい

るよ。日本にいる在日朝鮮の人々はそのほとんどが拉致被害者さ。朝鮮から強制連行されて強制労働から慰安婦までさせられて、絶対に許されないことをしているのはこの日本さ。今でもそれに対するしっかりとした謝罪や責任はとっていないんだ。政府はさ、『唯一の被爆国日本』なんて言っているけどさ。そこには強制連行された朝鮮の人々がいたんだーや。わったーが今していかなければならんと思うのは、そういったことにしっかりと責任とってや、侵略絶対にしません、と世界中に発表することだと思っけさ。それが出来た時によ、まずキム・ジョンイルの言っている政治的なプロパガンダを覆して、今まで抑圧と飢えに苦しんできた朝鮮の人々が立ち上がって自分達の国を取り返す。それが戦争をしないで拉致被害者が日本に帰ってくる方法さ」

Aさん「だー、言っていることは分かるけどよ。キム・ジョンイルが倒されるかどうかなんてわからんさー」

晋「いー、おじさん今まで歴史上で独裁者は全て民衆に倒されてきたんだー。今、わんの上にのさばっている政治家も含めてや。そのためにまずはわったーの上にいると思っている政府の人間達にどいてもらわんといかんと思うよ。わんはいま、拉致被害者の人達を戦争屋ーによ、利用されていること自体がおかしいと思うんだー。だからこそ、わんたちが拉致被害者の人達ともしっかりと今までいってきたことに希望を見せられるように向き合っていかなとさいけんわけさーね。」

Aさん「そうかー。そんな考え方は初めて知ったさー。整理つかんけどよ、あんたが言っていることはなんとなく分かるよ。つまりわったーが怒るべきなのは方向が違うわけだろー？」

晋「そうさー、わったーの生活を破壊しち、働く人から権限奪ってやー、沖縄に基地をドンドン押し付けて”美しい国”なんて言ってる安部さんこそ倒されるべきさ。そしたら初めてアジアの人達と生きていける世の中になるばーて。そのための第一歩が辺野古の基地建設を阻止することと、パトリオット配備とか軍隊の再配備を阻止することさ。やんだーや（そうでしょう）」

Aさん「おー、やんだー」

今、政府は北朝鮮が「核実験を行った、許せん！」などとナガサキ・ヒロシマを利用して大々的にわめいています。しかし、本質とはどこにあるのか、沖縄から見れば一目瞭然です。年間にどれだけアメリカが核実験をやっているのか。それによって、そのアメリカの領土であるハワイが、その中で幾つの島を汚され、放射能汚染に

苦しんで来たのか。

私は決して北朝鮮の独裁が良いとは思いません。しかし、そのことを侵略戦争に利用しようと画策している人間がいるということ。そして、私たちが信じるべきは北朝鮮で苦しみ続けている人々であるということ。しっかりと話せば多くの人たちが当然のことに気付きます。政府が言っている論理とはここまで貧相なものだったということです。

まるで経済制裁を批判することが「国賊」、北朝鮮バッシングを否定することが「国民感情に反する」という風潮は絶対にそのままにしておいてはいけないものです。多くの革新と言われている人たちやナガサキ・ヒロシマに誠心誠意取り組んできた人たちこそが、今まさにしっかりと打ち出していかなければならない内容があるはずで

今まで行われてきた侵略戦争は、歴史上一度も「侵略する」と言って始められてきたことはありません。全て「国防・自衛」の名の下に行われてきたのです。今まさに沖縄が行っているパトリオット配備阻止・辺野古基地建設阻止の闘いは全国に対してそのようなことをはっきりと訴えているのです。

今こそ、沖縄の労働者と平和を愛する人々に共鳴し、闘いを根本から問い直し、立ち上がる時だと考えます非常に生意気なことを言っていると知っていながら、しかし、この状況を変えるためにやらなければならないことを私たちはやります。

私たちが生きるためにやるべきことは、現在の政府や基地こそがいらないんだと訴えを広げることだと考えます。私たちの闘いを支持している人たちは全国に、全世界に大勢いるということを思いましょう。私たちは一人ではない。

ベトナム戦争のときのことをベトナムの人がこう表現していました。「ベトナムは今でも沖縄を最凶、最悪の島だと思っている。しかし、ベトナム戦争時の一つのことが忘れられない。B-52が飛ばない日があったということ。後から知ったことだが、あの時、B-52を沖縄の軍雇用員（全軍労）たちが止めていたということ。私達はあの日を忘れない」

僕はその言葉を忘れることが出来ません。そしてそうしなければアジアの人たちは私達を許さないでしょう。そして現在も現在の日本を、沖縄を許せないと声を上げるアジアの人たちがアジアの大多数として存在していることを忘れてはならないと思います。

頑張りましょう。私たちは正しいことをしているので。この意志は必ず、多くの人たちを立ち上がらせる結果になります。弾圧や政府の情報操作に屈せず、勇気を出し、堂々と表に出て真実を多くの人達に知らせましょう。パトリオット配備・基地建設阻止のために全国の力を貸してください。



環境情報おきなわ(2007 年 1 月～2007 年 2 月)

◆おきなわNPO月間 2007 オープニングイベント

『私らしき発見! ボランティア・NPO 出会い市』

ボランティア団体や NPO は、多くの市民に活動への理解や共感を広げたいと考えています。一方、市民は「ボランティアしてみたい」「社会の役に立ちたい」という気持ちがあっても、その機会を得られずにいます。本事業は、市民とボランティア団体や NPO の出会う場をつくり、市民活動への理解と実践につながる機会を提供することを目的に開催します。特に、今年度は、大学生グループとの協働により市民活動団体と大学生が出会う機会となることもめざします。当日は参加要件を満たす県内のボランティア団体や NPO 約 50 団体が参加します。

日時／2007 年 2 月 4 日 (日) 午前 10 時～午後 5 時

会場／沖縄国際大学体育館

問合せ／電話 (098) 887-2000

沖縄県ボランティア・市民活動支援センター

◆引き続き辺野古へのカンパをお願いいたします

名護市辺野古では、いまま海上基地建設反対の座り込みが継続されています。知事選の結果を受けて、反対する人々への圧力がより強まることが予想されます。これまでも増してのご支援をどうかよろしくお願い申し上げます。カンパの振込先は以下の通りです。

●琉球銀行南風原支店 普通口座 331-622

タカミネ チョウセイ

※カンパに関するお問合せは沖縄環境ネットワーク (098-832-8484) まで。

◆宮城晴子画集

名護市の東海岸の嘉陽で豊かな沖縄の自然と人情の中で暮らす画家の宮城晴子さんが、辺野古の海の美しさを画集にしました。いつまでも大事にしたい自然を、その素朴な筆致で鮮やかな陰影の中に再現しています。画集を見た山口洋子さんが、手軽な絵葉書にして是非多くの人に見てもらいたいと思い立ち、併せて自然保護の運動基金として宮城さんの了解のもと、沖縄の美シリーズ①宮城晴子作品集海の詩②宮城晴子作品集ふるさとの詩として出版致しました。是非御購入下さい。

●宮城晴子画集「海の詩」(3500 円+税)

問合せ／名護市嘉陽 28 番地 宮城晴子

●宮城晴子作品集「海の詩」(500 円)

●「ふるさとの詩」(500 円)

問合せ／電話 (098) 893-0175 山口洋子

◆【書籍販売】 郵送します

◎『沖縄の環境と平和』1,000 円

◎『低周波音公害調査報告書』500 円

◎『沖縄から世界へ』1,000 円

◎『沖縄からコスタリカへ～平和憲法とエコツーリズムの旅』1,000 円

◎『沖縄型・回分式参加溝のすすめ』500 円

◎『沖縄のエコツーリズムの可能性』1,000 円

事務局 (098-832-8484) までお問合せ下さい

◆沖縄環境ネットワーク世話人会 参加自由です!

日 時：お問合せ下さい

場 所：沖縄環境ネットワーク事務所

年会費：個人会員：3,000 円 学生会員：1,500 円

家族会員：3,000 円 団体会員：10,000 円

特別賛助会員：100,000 円

郵便振込先：(口座番号) 02010-9-20132

(加入者名) 沖縄環境ネットワーク

◆メールアドレスをお持ちの会員の皆様へ

沖縄環境ネットワークでは、会員の皆様とのネットワークの双方向化の一環として、メールでの情報送信を視野に入れています。よろしければメールアドレスをお持ちの会員の方は、下記の沖縄環境ネットワークのアドレスまでご連絡下さい。なお、提供いただいたアドレスは他の目的には使用いたしませんのでご安心下さい。



■編集後記■

先日の知事選は海上基地建設を事実上容認する知事が当選し、「県政の継承」が着々と進められる予感がしています。その直前にもたらされた宇井純先生の逝去の報…。沖縄に住む少なからぬ人々がこのWショックに「チルダイ (呆然とすること)」しています。(哲)

沖縄環境ネットワーク通信・第 34 号

2006 年 12 月 10 日発行

発行 〒902-0075 那覇市国場 512 番地

ワタリアパート 106 号

沖縄環境ネットワーク

TEL/FAX 098-832-8484

E-mail/netwind@atlas.plala.or.jp

発行人 桜井 国俊 編集 酒井 哲哉

http://homepage1.nifty.com/okikan/